

異分野交流できる 出会いの場を提供

会計理事 守倉正博



我が国における若者の理工系離れ、電機産業の業績不振等、様々な要因が影響して本会の会員が毎年減少している状況です。本会の会員増加施策として種々の取組みが行われ、日本だけでなく海外の研究者・学生に対しても積極的に加入するような取組みが行われています。学会という組織が正常に機能し、持続的に発展するためには規模の議論が重要です。この議論を行う上で、学会に参加する動機付けを通じ、より広く本会に参加してもらうことについて述べたいと思います。

学会に研究者・技術者・学生が参加するのは、自らの研究成果を世に問い議論を行い、情報を収集することが主な目的だと思います。しかしその前に、学会に人が集まる動機付けは、そこで何か興味を刺激する面白そうなことを行っているからではないかと思います。つまり、そこに行けばワクワク・ドキドキできる体験ができ、自分でもやってみたい、できるなら他の人よりうまくやってみせたいということです。皆が集まる場で切磋琢磨し、自分の実力に関して皆からの評価を得たいということがあるように思えます。

ICT 技術の各分野では、これまで技術の研究開発と学問的体系化が図られてきましたし、更に改善改良が進められているところだと思います。これらの努力の一方で本会の会員を増加させるためには、ICT 技術を用いた関連領域の研究者を更に取り込む必要があろうかと思っています。多くの情報機器や通信機器も世の中に登場した当初は、本当にワクワク・ドキドキさせる道具であり、多くの関心を集めました。現在はコモディティ化しつつあるのではないのでしょうか。その一方、ICT 技術に対する世の中のニーズは増すばかりです。エネルギー問題を扱うスマートグリッドも電力網に ICT 技術を用いて実現しようとしており、メディカルケア、ヘルスケアといった今後世界が解決しなければならない高齢化社会の課題も ICT 技術を用いて解決することが必要です。環境問題や交通問題にしても、積極的に ICT 技術を用いて課題解決を図ろうとしています。ICT 技術は現代社会の抱える課題への万能薬のようなものです。

クレイトン・クリステンセンの著作「イノベーションのジレンマ」にあるように、世代を重ねて改良していく技術はいつか新しく台頭する破壊的イノベーション技術に敗れ去ります。新しいイノベーションを起こすためには、従来技術の改良による世代交代を繰り返すだけではなく、破壊的イノベーションを生み出す斬新な発想が必要です。新しい発想は突如として頭脳にひらめく場合よりも、自分とは専門領域の異なる研究者間で議論する場合に生み出されるのではないのでしょうか。このため異分野交流の場が重要で、共通の研究課題をうまく設定することが必要です。共通の研究課題が設定できれば、研究分野が異なっても継続的な集まりができるものだと思います。例えば、狭い範囲の無線 LAN やセンサネットワークを研究するという範ちゅうからスマートコミュニティを研究するというように広範囲な研究テーマに広げた場合に、ICT 技術だけでなく、建築、機械、土木等々横断的な議論をする場が必要です。このときに、いかに皆がワクワク・ドキドキするような夢を語れるかが重要です。ICT 技術は万能薬としてその応用範囲が広いわけですから、パートナーと組むことを待つのではなく、こちらから相手の領域に飛び込むくらいの意気込みで進めていく必要があるように思います。そのために本会が持つシステムをもっと積極的に利用し、他の技術分野領域の研究者と協調して、より豊かで安心安全な社会を作ることに貢献できるように努力していきたいものです。